

羽根の禿

長唄 全詞章

変化舞踊「春昔由縁英」の一

別題「禿」

恋の種蒔き初めしより色といふ、言葉はいづれ此の里に

誠こもりし一と廓、丸い世界や粹の世に、嘘とは野暮の誤りと、笑ふ禿のしほらしや

禿禿とたくさんそうに、言うてくだんすな、こちや華魁に恋の諸訳や手管のわけも、

教へさんした筆の綾、よう知るとは思はんせ

ヲヲ恥しや恥し、しどけ態振可愛らし

文がやりたやあの君さまへ、とりやちがへて余の人に、遣るな花のかのさまの、サテ

花のかのさまの手に渡せ

朝のや六つから朝のや六つから上ぎぬ下ぎぬひつ重ね

〔羽根つき〕 禿は袖の振り始め、つくつくつくには羽根をつく、一イ二ウ三イ四ウ五重に

七重に、ことは三十三四十五手はまおく二十一イ二ウ三イ四ウ

見よなら見よなら松をかざして梅の折枝、それさこれさそれ粹た三味の手

梅は匂よ桜は花よ、梅は匂よ桜は花よ、いつも眺は不二の白雪